

特集 〈遠足・園外保育〉

『遠足』百景

永倉 みゆき

一 私から『遠足』を望む

幼い頃の私にとって、遠足という文字の中にある『遠』の字には、憧れのようなうつつとりするような響きがあった。いつも通っている所を遠く離れて、普段できないことができる日、遠足。たとえば、普段のおやつよりずっと多い量のお菓子を持つていくこともできる。前日から準備に取りかかるのだが、当時は、今のようにお菓子も近くのスーパ―に多種

揃っているわけではなく、当然、遠足用のお菓子は母の自転車の後ろに乗って、はるばる商店街まで買っていくこととなる。遠足は、その準備から既に「遠く」日常から離れていくものだったのである。そして、この「楽しみに待つ」ということが、遠足にとってどれだけ大切なことであったのかと、今になってひしひしと感じている。また遠足というと必ずといっていい程、前日あたりから急に雲行きが怪しくなったのはなぜか。何のことはない、つまりは

子どもであった私にとって、普段天気というものは気にもかけないものだったのだろう。唯一晴れを願ったのが、この『遠足』という特別な日だったのだ。

このように、私にとつての遠足の思い出というのは、行つて何かをしたことよりも、それを待っている時のほうがずいぶん多いように思う。『遠足』を待つ時間の中で、私はたつぷりと『遠足』について期待をし、想像の中で味わいつくしたのである。期待が大きいものほど失望も大きい。かくして大きな期待をリュックにいっぱい詰めた私は期待と違ふ「あつ」という思いを何度か味わうことになる。そのようなわけで私にとつての遠足は、目的地に着いた時点で、もう楽しみの内の四分の三くらいは終わっていた。もつともこれは私から見えた『遠足』の景色なので、他の人もそうだったのかは定かではない。

## 二 先生から『遠足』を望む

初めて勤めた小学校は、山深い里の小学校だっ

た。毎日車で四十分ドライブしながら通った学校である。休み時間にクラスの子全員（十二人）と野いちごを採りに行つて、次の授業がなくなつてしまふような、そんなのんびりした毎日だった。天気がいいと、給食を校庭のベンチまで持って行つて皆で周りの豊かな緑を眺めながら食べた。「あの山は怪獣みたい」「あの雲がくじらぐもかなあ」「ぼく、あの滝まで登るのが夢なんだ」。私自身にとつては、毎日が『遠足』みたいなものだった。保育園でよく行く「お散歩」、大人でいう「散策」を、はからずも私は毎日のようにこの学校の子どもたちと楽しんでいたのである。

そんな、敢えて遠足に行かずとも十分自然に恵まれた学校の遠足は、ここに通う子どもたちにとつて一番遠い所「海」に行くことであつた。海に着いた子どもたちは、私の子どもの時の遠足の十倍くらい嬉しそうだったように記憶している。今でもあの学校は、まだのびのびした学校でいるのだろうか。子

どもたちはまだ「海」が遠い所だと感じているのだろうか。

次に勤めた幼稚園もまた、自由感にあふれる園だった。四月、年間計画を決める時に、入園、進級した子どもたちの顔を見て「さあ、今年は運動会をやることにするの。どうするの」といったことをわいわいと話し合った。遠足も然り。その時のメンバーを見て、虫をとるのが好きな子が多いと「虫とり遠足」「ザリガニとり」などを計画し（行きたくなった担任が中心になって積極的に進めていく）、どんどん実行に移すといった具合。『遠足』は、お決まりの行事でやらなくてはならないものではなかったから、逆に「今、この子どもたちが必要としていた遠足は何だろうか」とそれまで行くことに何の疑問ももっていなかった『遠足』について考え直し、子どもたちの毎日の遊びをより注意深く見ることになった。そんな中で心に残る遠足は、園から見えるしずはたやま賤機山に年少、年中、年長と三年かけて登るとい

ものである。全員

で一緒に出発する

が、年少児は、ほ

とんど登ることな

く山の入り口にあ

る浅間神社でしいの実を拾って遊び、年中児は頂上

に後一步というところまで登り、年長児は年中児と

逆のルートで尾根伝いにはるばる頂上までやってき

て、降りながら年中児と合流する。ある時は、お別れ

遠足として親子で同じ山を縦断したこともあった。

この場合は、遠くへ行つたことがないから面白い

のではなくて、春夏秋冬いつも園から眺めている一

番よく知っている山だからこそ面白いという「一番

近い遠足」なのであった。おまけに何年もかけてい

ろいろな角度からひとつの山に向かうからこそ年長

になると、この時ばかりは普段の「連れていっても

らう」立場を逆転させることさえできるのである。

この、同じ場所に何度も行くというのは、私にとつ



でも目からうろこの経験であった。

次に小学校に移った時、「生活科」が始まっていた。授業の区切りも「ノーチャイム」になり、いわゆる融通の利かない学校のイメージが少しずつ変わろうとしている時だった。しかし、遠足は窮屈だった。何が窮屈かというと、その度ごとに「今回は、ペアと仲良くなる」「今回は、ペアとお別れをする」「たくさん歩く」といろいろな目的があるからだった。その目的自体は大切なことではあるのだが、私の中にある『遠足』のイメージとは大分違っていた。これでは『遠足』の名前を被った「授業」である（まさにその通りなのだけども）。楽しいことには違いなかったのですが、徐々にそんなものかと納得するようになったが、心に少々の苦味は残った。登校に一時間近くかかる子もいるのに、そこから更に二時間近く歩いて目的地ではんの少し遊ぶ。そして同じ時間をかけて帰る。本当にそれが一年生にふさわしい『遠足』なのだろうか。学年部で相談して

コースを変更した時「自信がつくから、大変でも是非やってほしかった」と昨年の一年生の先生方に残念そうに言われたのを覚えている。先生たちが大変だから止めたと思われたのかもしれない。

私たちの学年部は、『遠足』でできないことを「生活科」という時間を使って楽しんだ。近くの遊水池に春夏秋冬出掛けて行って植物や水生動物、鳥を観察したりしたのは前の幼稚園で経験した「近くの同じ場所に遠足」のバリエーションである。『遠足』という名称にこだわらずに独自に『遠足』を楽しむ、ということを感じたのがこの時代だった。

次に勤めた幼稚園で、まず驚いたのは、ほぼ毎月遠足（名称は園外保育）があるということであった。住宅街にあり人数の割には狭い園だったので、それも理由だったのかもしれない。それにしても、遠足は、たまに行くから楽しいのであって、多すぎるのは、過ぎたるは何とやら……ではないだろうか。しかし、それもほぼ決まっていることであり

(ちゃんとこの時期にはこういう経験をさせたいというねらいがある)、それを変えるのはなかなか大変そうに見えた。とにかく、少しでも本来の遠足の楽しみに近づけたいと、回数を減らしたり目的地を近くにしたりしたのだが、既に形ができてしまっているものを変えていくのは、新しくつくっていくのより難しい。園外保育の計画、日にちの確定、下見に毎月追われていたように思う。他のどこよりも大変な『遠足』の思い出である。

こんなふうに、私の中の『遠足』のイメージは、自分が子どもの頃感じていたものから始めて二転三転してきた。

### 三 子どもから『遠足』を望む

大人がどんな目標を設定しても、その隙間でしっかり遊ぶのが子どもである。先生の中にいろいろな『遠足』についての見解はあろうが、子どもにとって『遠足』は、日常を離れ楽しめるわくわくしたも

のであることには違いない。だからこそ、思いがけないこともよく起こる。

「帰る時間だよ」と声を掛けると、子どもは名残りを惜しんでリュックにめいめいの思い出を詰め始める。木の葉や石などがビニール袋に入ったもの、つかまえた虫などである。その時、A子もそんな気持ちだったに違いない。ただ、思い出がちよっと大きかっただけで……。

「A子ちゃんのリュック、動いてるみたい」の声に担任がのぞいたところ、リュックの中にいたのは何と一羽の鳩。見つかったもA子はケロツとした顔でまた鳩を逃がしていた。他の子もちよっとはびっくりしたが、またすぐ他のことで忘れてしまっていた。子どもの世界では珍しいことではないらしい。

また、これはいわゆる『遠足』ではないが、二年生の子どもたちと生活科でじゅず玉を取りに行った時。予定時間を過ぎても学校に戻れず、この時は最初に書いたのどかな学校ではなかったから、私は内

心穏やかではなかった。次の時間は国語である。戻れないとその分授業が遅れてしまう、これは困った。

「がんばって学校に戻らなくっちゃ」という私に「先生、ここで国語やれば」と言う声。え、どうやって、と思う間も無く「くまのこウーフの朝ごはんは、パンとはちみつと……」と何人かが言い始めた。国語でやっていた「ウーフは何でできているか」という作品の出だしの部分である。それに続けてもっと大勢が暗唱していく。途中自信なく途切れそうになると、いろいろな声が重なり、なんとかつながらって、とうとう最後までいってしまった。最後まで暗唱できた本人たちもびっくり。「やったー」と歓声をあげつつの帰還となったのである。

私は思う。これは、教室の中では起こらなかつたことだ。秋風に吹かれて気持ち良い田舎道を歩いていたからこそ起こり得たことなのだ。一瞬そこがウーフの世界に見えた。

子どもは、日常から離れて『遠足』に出ると、心が

解放され、その魔力が冴え渡る。子どもたちの魔力にかかり、リュックは一瞬にして荷物を運ぶ道具から宝の袋に変わり、田んぼは物語の世界に変わる。

ところが困ったことに、近年この魔力が弱りつつあるように思える。あまりに便利になった生活の中で「遠い、知らない場所」という感覚が薄れてきた。日常に自家用車で遠くにも行けるため、いろいろな場所が身近になってきた。そのためせっかく魅力的な場所に行っても、「ああ、ここ知ってる」と思いこんでしまう。その途端に、心のシャッターがガラガラと閉まってしまうのだ。いつか、野原のような芝地に遠足に行った時「なあんだ、遊具がないじゃん」と言った子がいた。彼にとつては『遠足』は、移動した場所で遊具で遊ぶことだったのだ。それは間違っているのではないだろう。しかし、幼い頃私がわくわくと待った何か未知のものが待っているかもしれない『遠足』とは少し違うのではあるまいか。遠足の景色も少しずつ変わってきている。（常葉学園短期大学）